

天児慧先生と AHC 研究所

山 田 満 (早稲田大学社会科学総合学術院教授)

天児慧教授は、私がいうまでもなく現代中国研究の第一人者の一人である。しかし他方で、天児教授の研究の守備範囲はアジア全域の国際関係でもあり、そのアクターも政府、地域機構、国際 NGO などの相互関係にも関心を寄せる。AHC 研究所の設立はその一つの証左である。AHC とは、Asian Human Community, つまり天児教授は従来の国家主権を中心とするアジアの安全保障観とは一線を画する「アジアにおける『人間の安全保障』」を考える場を創造することを目指したのだ。

AHC 研究所は、2008 年に当時のアジア研究機構のプロジェクト研究所として設立された。筆者は当時、他大学で教鞭をとっていたが、国際 NGO やグローバル市民社会とネットワークを有する私にも学外からの参加が求められた。筆者も縁があって、2009 年から早稲田大学社会科学総合学術院へ転籍したのを契機に、翌年 4 月から AHC 研究所の所長を引き継ぐことになった。主だった理由は、天児教授が人間文化研究機構の中国プロジェクトの代表に就任することになったからだ。

天児教授が AHC 研究所の設立主旨で述べたことは、第一に、アジア各国の行動的知識人を中心とし、平等・互惠を原則とし、「アジア共生」の創造を目指す「知的ネットワーク」の構築を図ることであった。つまり、AHC を単なる研究フォーラムではなく、アジアの知識人、各界リーダーなどの人的ネットワークを組織することで、そして何よりもこれらの人的ネットワークを基に「問題解決の方策」を創造することであった。これらの問題解決型フォーラムにはアジアを中心としながら、欧米諸国からも広く関心を寄せる知識人の参加を促す国際知的共同体の役割を期待していたのだ。

第二に、AHC ネットワークは「トラック 2.5 方式」の充実・発展を目指した。これまでアジアは主に政府影響下のシンクタンクの役割が大きかった。それらシンクタンクの役割を軽視することではなく、むしろ AHC の役割をアジアの市民社会、市民参加を促すハブにすることで、政策提言が可能な民間レベルの主体的な役割と実践を重視したのだ。一言で言えば、「アジア・ヒューマン・コミュニティ (AHC)」の創造を目指したのである。このコミュニティこそ、「トラック 2.5 方式」と考えた。

第三に、AHC は、既存の様々なネットワーク、例えば環境保護、紛争解決、平和構築、人権、開発などの様々な分野のネットワークを連携し、包括する「ネットワークのハブ」としての役割を担う組織として位置づけた。また、AHC が核となって、アジアの市民・知識人の社会的政治的影響力を増大させていくことを目指した。

これら三つが AHC 研究所の目指したネットワーク構築の意図であった。また、核心となるヒューマン・コミュニティのコンセプトに関しては、「人間の尊厳こそが、共同体を考える上での最も重要な立脚点であり、ある人間（集団）の犠牲を強いる発展も共同体も、このコミュニティが目指すべきものではないという考え方をしっかりと持つことである」。それゆえに、相互扶助・協力、互惠・相互発展のコミュニティを構築することが AHC 研究所の核心になると述べている。

最後に、AHC の活動のテーマとして、三つあげている。第一に信頼醸成メカニズムを行う上で、

相互誤解の減少と相互理解の深化を掲げ、第二に相互協力・支援メカニズムを行う上で、体系的、効率的協力・扶助の推進を訴え、第三にアイデンティティ醸成メカニズムを行う上で、歴史的・未来創造の共有、アジア意識の創造に関するプログラムを設置することを宣言した。

天兒教授の士気が高揚する上記問題提起は、2009 年 2 月に開催された「非伝統的安全保障国際ワークショップ」に先立って発表されたものであった。天兒教授も当然ながら壮大な構想の実現の困難さを認識した上で「継続は力なり。小さな第一歩でも力を合わせ継続していけば大きな夢を自分たちに近づけることはできる」と述べている。

この一文に天兒教授の AHC 設立の強い思いを感じる。誰がなんと言おうとも天兒教授は「熱血漢」である。正しいと信じることをやり遂げる信念の人でもある。私がそれを強く感じた一つの思い出を紹介しよう。2005 年 9 月に「アチェ和平市民会議」を早稲田大学の国際会議場で開催した。インドネシアのアチェでは 1975 年以来、インドネシア軍と自由アチェ運動（GAM）との断続的な戦闘によって、一般人を含む 1 万 5 千人を超える犠牲者を出していた。

インドネシア軍のバールに包まれていたアチェ地域であったが、2004 年 12 月未曾有の大地震であるスマトラ沖大地震・大津波が当地域を襲ったのだ。アチェ地域でも約 12 万人の犠牲者、行方不明者数も約 13 万人という 25 万人規模の被害者を出すことになった。そこで、当時のユドヨノ大統領は結局同地域で国際社会からの全面的な支援受け入れを表明したのであった。

筆者が所属していた NGO も現地を訪問した。軍などの弾圧の心配もあり、場合によっては深夜での面談もあったが、その中で紛争予防 NGO の私たちに対する強い要望として、日本でのアチェ和平支援の会合を求められたのだ。困難な要請を受けた私たちの使命感を天兒教授は真摯に受け入れてくれた。アチェ紛争に関わるインドネシアの人権弁護士、GAM マレーシア代表、紛争予防に従事する NGO 関係者、インドネシア政府関係者、さらには日本政府からも参加するという、まさに同紛争のステークホルダーすべてが早稲田に集合したのだ。

もちろん、アチェ市民和平会合に関わるほとんどの経費は天兒教授が獲得していた助成金で対応してくれた。2005 年 8 月に和平が実現したその翌月の開催という世界的にも注目された会合であった。アチェの人々、和平のために尽力してきた NGO から大変感謝された。言うまでもなく、この会合の実現は天兒教授の強い信念と熱意がなければ実現しなかったし、何よりも「小さな第一歩でも力を合わせ継続していけば大きな夢を自分たちに近づけることはできる」のだという考え方に収斂されよう。

天兒教授と筆者との共通したエピソードを紹介したが、私が存じ上げている天兒教授にはいくつもの挑戦的な試みがある。また、私がいつも天兒教授に敬意をいただくのは、「基層」（グラスルーツ）を重視していることだ。それは AHC 設立に繋がるが、天兒教授の研究業績にはその視点が垣間見られる。中国研究と向き合い、現実主義の重要性を理解する一方で、国民国家を構成する草の根の人々、無辜の人々の日常生活を絶えず思いやる視点を重視する。筆者が関わる市民社会運動に共鳴し、アチェ市民和平会合への強い支援を受け入れたことが証左であろう。

天兒教授には『日本の国際主義—20 世紀史への問い』（1995 年、国際書院）というグランドテーマを扱った著書がある。その中の文章を紹介して本稿を終えたい。「人類は常に新たな環境と課題に現実的に直面しつつ、それを乗り越えるための思想的・実践的な模索と格闘を続けることを強いられている」。「人類」を「天兒」に変えると、天兒教授の人生の軌跡が読み取れるはずである。今後のご健勝と益々のご活躍をお祈りする次第である。